

大鹿卓研究： 以戰前昭和期的礦山小說為中心

簡中昊*

中文摘要

近代作家大鹿卓主要活躍於戰前昭和期，由於其小說多以礦山為舞台，被譽為「礦山師之文學」。本文主要考察「礦山師之文學」的形成過程及其意義。本文發現，大鹿的礦山小說多將中小礦業者的父子關係設定為潛在課題，作中的「父親」形象映照出小布爾喬亞的道德與階級問題，而故事主角的「兒子」企圖克服問題的意圖，展現出新世代的「小布爾喬亞的良心」，以及將小布爾喬亞樹立為「新倫理主體」的可能性。就階級立場與文學課題而言，大鹿與同時期的前左翼作家們有本質性差異。透過考察大鹿未發表的親筆原稿「金山之辯」，可以得知大鹿當時正進行採金事業，試圖在現實中完成思想與行動的統一。回顧近代文學史，可以發現夏目漱石與志賀直哉在文學書寫上，均曾面臨過與大鹿類似之情境，大鹿可說是承接兩人之書寫脈絡的自由主義者。

關鍵字：大鹿卓、轉向文學、生產文學、淘金熱、足尾銅山

* 國立屏東大學應用日語學系助理教授

Oshika, Taku Studies: Focusing on mine novels in the prewar Showa period

Chien, Chung-Hao*

Abstract

The modern writer Oshika, Taku was mainly active in the prewar Showa period. Because most of his novels took the mine as the stage, it was known as "the literature of the mine master". This paper mainly examines the formation process and significance of the "the literature of the mine master". This paper finds that Oshika's novels set the father-son relationship between small and medium-sized miners as a potential topic. The image of the "father" in the work reflects the moral and class issues of the Petite bourgeoisie. The intention of "son" to overcome the problem reflects the subjectivity; compared with the left-wing writers of the same period, Oshika is very different from the former left-wing writers.

Key Words: Oshika, Taku, Turning Literature, Production
Literature, Gold Rush, Ashio Copper Mountain.

* Assistant professor, Department of Applied Japanese, National Pingtung University.

大鹿卓研究

—戦前昭和期の「鉱山もの」を中心に—

簡中昊*

要旨

近代作家の大鹿卓は戦前昭和期に活躍していたが、その小説は鉱山を舞台にするものが多かったため、「鉱山師の文学」とも呼ばれる。本稿は「鉱山師の文学」の形成過程と意義性を考察するものだ。

大鹿の鉱山小説では、中小鉱業者における父子関係が潜在的な課題と設定されている。作中の「父」のイメージには小ブルジョアの道徳的・階級的問題が反映されるのに対し、主人公の「息子」が問題を超克する意図は「小ブルジョアの良心」の表現で、そこには「新たな倫理主体」を樹立する可能性が提示される。階級的立場と文学の課題に即して言えば、大鹿には左翼作家とは本質的な差異が存在している。また、大鹿自筆の未発表原稿「金山の弁」を考察すると、当時の大鹿は採金事業を始め、自身の思想と行動の統一を求めようとしたことが理解できる。近代文学史をふりかえるなら、大鹿は夏目漱石や志賀直哉の流れを汲むリベラリストとも言えよう。

キーワード：大鹿卓、転向文学、生産文学、ゴールドラッシュ、
足尾銅山

* 国立屏東大学応用日本語学科助理教授

大鹿卓研究 —戦前昭和期の「鉱山もの」を中心に¹—

簡中昊

1. はじめに—「鉱山師の文学」とは何か—

大鹿卓（1898-1959）は詩人・金子光晴²の弟で、萩原朔太郎の推賞を受けて詩集を出版するが、後に小説の創作を始め、戦前昭和期に度々受賞した作家である³。今日の学界では台湾原住民を描く「野蛮人」（1935）に関心が集まるが、当時の文壇では『渡良瀬川』（1941）を代表とする大鹿卓の「鉱山もの」が評価されていた⁴。しかし、管見の限りでは、「鉱山もの」に関する研究は殆ど無い。これはおそらく学界の研究動向とは無関係ではないと思われる。戦後に出版された大鹿の著作は『野蛮人』（2000）や『大鹿卓作品集』（2001）が主であり、それぞれ『日本植民地文学精選集』（ゆまに書房）の「台湾編」と「樺太編」に収録されている。前者は戦前版の復刻だが、後者は樺太・千島関係作品を格別な意図で集めた一冊である。このことは、大鹿へのアプローチが植民地文学研究に基づくものとなった学界の主な関心を示していると思われる。

『大鹿卓作品集』解説において、川村湊は大鹿文学の主旨を論じている。川村によれば、秋田鉱山専門学校出身の大鹿は珍しく鉱山

¹ 本稿は国科会計画「戦前昭和文学研究：以大鹿卓為例」（111-2410-H-153-027-）の助成を受けたものである。審査にあたっては、大変貴重な助言を頂き、査読者および編集委員に深く感謝する。

² 金子光晴（1895-1975）、本名大鹿安和。愛知県海東郡越治村（現在の津島市下切町）に生まれる。光晴は三男で、卓は四男である。父の大鹿和吉が事業に失敗したため、二歳の光晴を建築業者の金子莊太郎の養子に出した。金子光晴全集刊行室、「年譜」、『金子光晴全集 第十五巻』、東京、中央公論社、1975、547。

³ 大鹿は「野蛮人」（『中央公論』2月号、1935）で中央公論賞、『渡良瀬川』（中央公論社、1941）で新潮社文芸賞を受けた。また、「探鉱日記」（『中央公論』9月号、1937）で芥川賞候補にも挙げられた。

⁴ 伊藤整によれば、足尾銅山鉱毒事件を描く『渡良瀬川』は、「本当の意味で大鹿の代表作」である。伊藤整、「昭和十年代 第11 解説」、『現代日本小説大系（河出書房版）解説集成 第三巻』、東京、ゆまに書房、2009、264。

学を専攻した近代文学者で、彼の作品には鉱山師や鉱夫を主人公とした「鉱山もの」、足尾銅山鉱毒事件⁵を描いた「鉱毒もの」や北辺の大地を舞台とした「千島・北方もの」などがあるが、内容的には「鉱山」という場所を中心に重なり合うため、大鹿の文学的・文学史的特徴は「鉱山」という世界を描くことにあるとも言え、「鉱山師の文学」とも評された⁶。日本の近代文学者にとって、鉱夫は最も古い職業の一つとして、金属を加工・精錬する技術とそれを持つ者はかつて畏怖・敬遠されたが、近代の科学文明の担い手でもあるため、鉱山は自然と人工、野蛮と科学が共存する場所となり、地中から掘り出された鉱石は「金にも」「権力にも」「欲望にも」なった⁷。こうした「鉱山師的感性」を持つ近代文学者は大鹿以外に「思い浮かべることができ」ず、彼の中では「野蛮と文明、自然と文化とが否応なく同居していた」ため、その作品世界は台湾、樺太・千島のような文明の中心から遠隔される辺境地域を舞台としていることは、その「鉱山師的志向性」において必然的だったと指摘される⁸。山の世界において、鉱脈に当たるまで一所不定の鉱山師、ギルド集団「友子」に見られるような民族・国家を越境した鉱夫の共同体、または野生の美・精神を身につけた台湾原住民などの人間同士の関わりは、大鹿のような近代人にとって驚嘆すべき絆であり、それへの憧憬や渴望を書き続けることは、近代文学史における大鹿の「位置」であると、川村は言う⁹。

川村の指摘は、一種の「反／脱近代」の立場から成されたものだと思われる。要するに、「鉱山もの」は近代文明によって形成され

⁵ 明治中・後期、足尾銅山の開発による鉱毒水・ガスの排出が周辺地域に甚大な被害をもたらし、日本初の公害問題である。

⁶ 川村湊、「解説」、『大鹿卓作品集』、東京、ゆまに書房、2001、1。

⁷ 前掲書『大鹿卓作品集』、2。

⁸ 前掲書『大鹿卓作品集』、2-3。

⁹ 前掲書『大鹿卓作品集』、3。なお、「友子」とは江戸時代以来形成された「ギルド的な性格を持った同職組合」で、徒弟制度による後輩の技能養成や相互扶助などを目的としたが、近代の鉱山業資本の支配を受けて変質、衰退し、1940年代では制度的に消滅し、戦後はごく一部が形骸化して残存した。村串仁三郎、『日本の鉱夫—友子制度の歴史—』、東京、世界書院、2000、12、14。

てきた一切の束縛から遊離逸脱できる「山」の世界、そこに生きる自由自在な人間像とそれへの憧憬や渴望が作品には描かれており、「鉦山師の文学」とでも言うべきものになっている。この指摘は非常に興味深いが、文学史的背景とテキストに即して具体的な分析は残念ながら行われていない。大鹿は小説家として昭和十年代に活躍していた。「野蛮人」の発表以降、大鹿は「鉦山もの」を書き始め、長篇小説『金山』（春陽堂、1939）を世に問うことはその一つの達成点だと言えるが、「鉦山もの」は労働・生産の場所を描く作品である以上、一種の労働文学とされるべきである、ということに注意したい。1930年代中期以降、昭和文学史はすでに転向の季節に入り、労働文学の主力だった左翼作家は自らの生き方に迷いながらも、文学の道を模索して進み、一部の者は国策に関係する生産文学に力を入れた。こうした文学史的背景を踏まえるなら「鉦山もの」はどのように位置づけられるべきか、そして近代鉦山業の発展や戦時下の経済統制とどのような関係にあるのか。また、労働文学として読むなら、作家自身の立場も問われる階級問題を避けて通ることはできない。そういった意味でも、現在、「鉦山もの」にはまだ未解明の点が多い。

本稿は「鉦山もの」の全貌を明らかにするため、昭和十年代の文学史と鉦山業史を考察したうえで、初歩的な分析を行う。具体的な方法としては、中野重治（1902-1979）、島木健作（1903-1945）や橋本英吉（1898-1978）などの同時期の左翼作家を対照に、「鉦山もの」の独自性を考えてみたい。研究対象のテキストは、鉦山の開発・生産に触れるものを分析対象として、「野蛮人」「火薬」（1935）、「童女」（1936）、「金鉦」（1937）と『金山』（1939）という五つの作品を選定する¹⁰。なお、近代文学における「鉦山もの」の源流として、夏目漱石（1867-1916）「坑夫」（1908）と志賀直

¹⁰ 筆者が見た限り、川村の解説を除いて、「鉦山もの」への先行研究は欠如している。「野蛮人」をめぐる先行論文は数多いが、鉦山を念頭に置くのではなく、台湾原住民を中心に考察したものである。

哉（1883-1971）「暗夜行路」（1921-37）¹¹についても触れたい。

2. 小ブルジョアの良心：「野蛮人」、「火薬」と「童女」

川村の解説では「鉱山」という場所を軸に作品間の関係性が指摘されているが、それは作中の探鉱という行為の発生地から考えられた視点である。筆者の考えでは、重要なのは「行為」（＝探鉱）ではなく「行為の主体」（＝鉱山師）である。この視点から見ると、「鉱山師」という要素はすでに大鹿の出世作「野蛮人」（1935）に息を潜めている。主人公の田澤が父の怒りを買って、台湾の山地に渡ることを余儀なくされ、そこで自らの「野性」が甦る。

ここで注意したいのは田澤が父の勘当を受ける原因である。田澤の父は筑豊の炭鉱の持ち主だが、労働争議が起こった際、田澤は労働組合の小宮と知り合って争議団に加入するが、それを知った父は単身で争議事務所へ乗り込んで来る。小宮は田澤を隠そうとする坑夫達を押さえ、帰れと冷たく言い放つ。小宮に裏切られたという思いが、父の面罵よりも「耐え難い打撃」だったと、田澤は思う¹²。

ここでは戦前昭和期の筑豊炭鉱争議を簡単に顧み、田澤の立場を考えてみよう。近代日本の石炭業は第一次世界大戦後の戦後恐慌や石炭需要の停滞とともに、長期的な慢性不況に陥っていた¹³。戦間期の石炭業は不振期（20年代）、恐慌期（30-32年）と回復期（33年以降）に大別できるが¹⁴、特に恐慌期には操業の短縮で鉱夫の需要が減少し、失業者が鉱山から大量に排出され、経営者は産業合理化（＝労働強化や賃金削減など）の方針を採り、労働運動を一層激しくさせたため¹⁵、労働組合員の解雇や組合への圧迫を反対する大

¹¹ この大作は1921年より『改造』に連載し、28年に中断したが、37年に再開、完結し、同年の改造社版『志賀直哉全集』の一卷として刊行された。

¹² 大鹿卓、「野蛮人」、『野蛮人』、東京、巢林書房、1936、4。

¹³ 荻野喜弘、『筑豊炭鉱労資関係史』、福岡、九州大学出版会、1993、13-19、139、255-262。

¹⁴ 前掲書『筑豊炭鉱労資関係史』、261。

¹⁵ 前掲書『日本の鉱夫—友子制度の歴史—』、203-204。

規模争議が続発し、一つのピークを成した¹⁶。一方、当局は産業組織化（＝企業合同やカルテル結成など）の政策を採用し、産業の自主統制で市場価格を安定させることだった¹⁷。石炭業で言えば、「昭和石炭株式会社」を通して価格を完全に管理するという形で行われた。ただ、それは「大手各社」の場合に限られる¹⁸。

日本資本主義発達史講座『鉱山業の発達』によれば、恐慌期の筑豊炭鉱争議は「中小鉱業」を中心に発生した。第一次大戦後の各産業の不況は燃料と原料を供給する鉱山業に激しい影響を与えると同時に、植民地鉱山の獲得は内地鉱業の一層の不況をもたらし、大手各社はカルテルの協定によって利潤の喪失を相対的に防ぎ、その負担を中小鉱業に転嫁したため、石炭業における近代資本主義体制の矛盾は「中小鉱業の多い筑豊に最も顕著に露呈された」¹⁹。中小資本家は「石炭鉱業互助会」を結成し、労働者の反抗を巧みに利用し、大資本家側から若干の譲歩を得られたが、従業員への整理・減賃の方針は一向改善されず、突如な解雇や賃金の不払い、休坑・廃業が度々発生したため、恐慌期の争議は中小炭鉱に集中し²⁰、警察、地方議員や地元有力者などの調停によって一定の改善、解決されたものが多く²¹、そのほとんどは労働組合に関係が深かった²²。

こうして読むと田澤の立場が明らかになってくる。彼は社会主義の理論家でも組合の運動家でもなく、大企業と労働者の間に挟まれた中・小資本家の階級に属している。田澤は労働者に同情の念を抱き、争議に尽力しようとし、自分を「隠そうとする」労働者にも認められはするが、階級問題で拒否された。田澤にとって「小宮に裏切られた思い」が「父の面罵」より「耐え難い」のは、小ブルジョ

¹⁶ 前掲書『筑豊炭鉱労資関係史』、380-384。

¹⁷ 中村隆英・尾高煌之助編、『日本経済史 6 二重構造』、東京、岩波書店、1989、54-55、116-118。

¹⁸ 中村隆英、『日本の経済統制』、東京、筑摩書房、2017、24。

¹⁹ 丸山一郎、『鉱山業の発達』、東京、岩波書店、1933、18-19。

²⁰ 前掲書『鉱山業の発達』、20-23。

²¹ 前掲書『筑豊炭鉱労資関係史』、385。

²² 前掲書『筑豊炭鉱労資関係史』、394。

アとしての労働運動からの疎外感によるものだ。田澤は後に「蕃地」生活で、運動への情熱や挫折感を「野蛮」への投身する熱意に転換しようとするが、それは如何にも難しそうだ。物語の結末に田澤は「蕃服」を着て「蕃刀」を腰に差し込み、「蕃人達」の人垣に立ち上がり、「檻に入れられた野獣のやうに右往左往しだした」と描かれる場面が印象深い²³、それは「本物の野蛮人」となりえて生き甲斐を見出せたのか、ということには疑問を感じずにはいられない²⁴。大鹿のほかの「蕃地もの」には類似の人物設定は見られないが、田澤の身に表現される中小鉱主の父への反発と階級問題による疎外感、後の「鉱山もの」を構成する要素だと思われる。

続く「火薬」（1935）にも類似の人物設定が見られる。主人公の信は恋人と父の不倫関係で、自分の血管に流れる父の「血統の淫蕩な澱り」を「亡してしまへ」と思って自殺未遂²⁵、東京の鉱業事務所を経営する父から離れ、次兄の繁のもとに身を寄せて山の暮らしで更生しようとする。繁は家運挽回のため、三人の鉱夫と小さな鉱山を営むが、坑道浸水、落盤事故や資金不足などの原因で着鍾²⁶が不可能となり、家業の傾きは既に予見されている。

「火薬」は大鹿卓と兄の金子光晴の家族事情に取材したことが指摘されているが²⁷、ここで着目したいのは鉱主と飯場頭の関係である。作中では、鉱主の繁と飯場頭²⁸の小栗・早坂の衝突が描かれる。小栗が鉱夫達に高く不味い食事を提供することに繁は怒り、声を荒げて怒鳴る。小栗は「旦那さん」は「鉱山のごとに馴れぬからし

²³ 前掲書「野蛮人」『野蛮人』、58。

²⁴ 田澤の心境については、拙稿「大鹿卓研究—戦前昭和期のモダニズム文学を視座に一」、『台大日本語文研究』、台北、台湾大学日本語学科、2022、10-12 参照。

²⁵ 前掲書「火薬」『野蛮人』、119。

²⁶ 鉱業用語。鉱脈にあたることを指す。

²⁷ 簡単に言うと、鉱専在学中の卓は父の和吉の紹介で兄の光晴と会い、また光晴は和吉の勧誘で鉱山事業に投資して失敗したが、この間に卓は光晴の鉱山事業に参与し、二人は共に鉱山生活を体験した可能性が高いと指摘されている。拙稿「大鹿卓研究—戦前昭和期のモダニズム文学を視座に一」、14-16。

²⁸ 後述するように、飯場は鉱山労働者の給食・宿泊施設で、飯場頭はそれを運営する現場管理者である。

て判んねんだが」、「奴らを搾つて」「サガリのすくねえやうにする」のは「事務所の為」だと放言し、繁は「生味噌なめて一人の男が働けると思ふか」と激怒して小栗を下山させた²⁹。一見、良心的な資本家のようにだが、後に落盤事故で重傷を負った鉱夫の松尾に対しては、繁は傷害手当の支払いを拒否し、新任の飯場頭の早坂に事故が「明かに松尾の不注意」だから、更に鉱夫達の出勤拒否は早坂による煽動だと言った³⁰。腹を立てた早坂の後姿を見送る繁は目が「不安げに翳つた」が、「あれ位に撃退しとかなないと」「奴等はどこまでもつけ込んでくるから」と、傍観した信の「非難の目」を抑えるように言い、信は「兄の苦衷を身に響き受けながら」、その「暴言に反撥したい衝動を募らせた」³¹。繁が鉱夫の不味い食事で飯場頭の小栗を下山させたことから考えると、彼はそれほど悪質な資本家でもなく、心の底には落盤事故に自分が責任を取るべきだと知っているだろう。一方、信は兄の経営難を知りながらも、良心の呵責に苛まれて鉱夫達を弁護したいが、ついに何も言わなかった。この兄弟像には、「野蛮人」の田澤と類似する良心が見られる。

「火薬」に描かれる鉱主と飯場頭の衝突には、戦間期の産業近代化の一端が窺えよう。ここで一度、両方の立場を考えてみたい。まずは鉱主である。第一次世界大戦の勃発によって、近代日本では重化学工業を中心とする「巨大産業」が興隆してきた³²。戦間期の鉱・工業資産上位の産業別構成で言えば、鉱業は終始上位3位であった³³。それと同時に財閥の支配力は近代以来の「最高の強さ」に達し、石炭や金属の優良鉱山をも押さえていた³⁴。「火薬」の繁と信のような家族経営は、財閥による巨大鉱業の寡占体制に立ち向か

²⁹ 前掲書「火薬」『野蛮人』、125。

³⁰ 前掲書「火薬」『野蛮人』、143。

³¹ 前掲書「火薬」『野蛮人』、142-143。

³² 前掲書『日本経済史6 二重構造』、第二章「巨大産業の興隆」参照。

³³ 前掲書『日本経済史6 二重構造』、90。

³⁴ 諸財閥は明治以来の諸産業を統合し、豊富な資金力で新しい産業に進出して経済の支配権を掌握し、寡占体制を形成した。中村隆英、『日本経済—その成長と構造』、東京、東京大学出版会、1996、104-105。

うことのできない、圧殺された中小鉱業者である。労働者に良心や善意を持ちながらも、経営者としての資金力は極めて貧弱で、少し痛手を受けたら直ちに窮地に立たされる。

次は飯場頭である。飯場制度とは、鉱夫の管理を現場責任者の飯場頭に委託して請負料金を支払う、という間接管理組織である³⁵。1900年前後、各鉱山企業は鉱夫採用・解雇の人事権を収め、直轄制度への移行を試み始めたにも拘らず、業務監督や賃金・日常生活の管理が飯場頭を通して行われる事態は30年代まで続いた³⁶。飯場制度の変革につれて、飯場頭は企業から得た請負料金の損失を補うため、鉱夫から「飯場割」という課金を徴収し、お互いの矛盾を激化させた³⁷。換言すれば、飯場頭は鉱夫と同じく労働者の立場に立つわけではない。この点は小栗の発言からも確認できる。

近代鉱山業の歴史とその産業構造を念頭に置き、「火薬」を巨視的に読むと、繁・信と小栗・早坂の微妙な関係は、資本家と労働者の対立というより、むしろ巨大産業と労働者に挟まれる「中間層」（＝中小鉱主と現場の管理者）の衝突であることがわかる。従来の労働文学における「資本家—労働者」という二元対立の構造と比べ、この視点は極めて特殊で、注意に値すると思われる。

続く「童女」（1936）では、中小鉱業の凋落が一層浮き彫りにされる。主人公の長尾次郎は東北の鉱山学校の出身で、父の命に従い、かつて東北諸県に六十餘鉱區を所有していた樋口老人と鉱山開発の現地調査に行く。父は小規模な鉱山を経営していたが、失敗を重ねて家産も傾き尽した。次郎は北海道の鉱山に勤めていたが、そこも廃山となった。父は次郎を樋口の娘と結婚させてその養子に出そうとし、樋口の力を借りて事業の再興を図ろうとしたが、調査も縁談も成就できず、樋口は無念の死を遂げた。

³⁵ 森本真世、「近代鉱山業における労働市場と労働組織」、深尾京司・中村尚史ら編『日本経済の歴史 3 近代 1 —19世紀後半から第一次世界大戦前(1913)—』、東京、岩波書店、2017、78-82。

³⁶ 前掲論文「近代鉱山業における労働市場と労働組織」、81-82、85。

³⁷ 二村一夫、「飯場制度の史的分析」、『足尾暴動の史的分析 鉱山労働者の社会史』、東京、東京大学出版会、1988、161。

この作は同じく大鹿の家族事情に取材したものと思われる。次郎は秋田鉦専出身の卓をもとに造形されているのに対し、次郎の父は放蕩な男として描かれ³⁸、卓の父・和吉とも合致している³⁹。特に、作中には樋口が次郎に若い頃の話をするという場面がある。ある年の早春、木綿問屋の番頭になった樋口は得意廻りにやらされ、「誰ひとり頭壓へる者のない旅先」で、体を「あふれ流れる湯の奢」も、夜明けの微光の中で「女の寝顔を眺める悔恨」も知ったが、ある日、一人の修験者と出会う。樋口は「千人の女の心が次々に身に纏りつづ」けることを望むと修験者に告げ、その言葉には「人間の血が傳へてある最も原始な聲がひそんである」が、「額に殺氣を漲らしていった」修験者は密かな祈禱を行った。その後、樋口が問屋主人の娘を奈良見物に連れて行くと、彼女から「情熱を傾け」てきた。二人は「半月ほど情痴に盡きる生活」を続け、無一文になった。主人が娘を連れ戻し、樋口は罵辱と愁嘆と共に宿屋の一室に取り残され、それは「癒し難い最初の傷手」だった⁴⁰。

この話は若い頃の和吉に取材したものだ。大鹿卓の遺稿「小さい魔」によれば、明治維新以降の時勢の激変、西南戦争による米価不況や得意先の凋落などが原因で、大鹿家の家業にはすでに衰退の兆しが現れていたが、祖父・林造の失明の後、父の和吉は代わって得意廻りの旅に出歩き、相当な集金を懐にする。しかし「拒みがたい衝動」で「脂粉のなかの流連が五日も十日も」続き⁴¹、後に家督を継いでも放蕩は止まず、侠客気取りの博打と女遊びに溺れた⁴²。おそらく、樋口老人も和吉をモデルに創出された人物であろう。

作中では次郎が父と樋口の放蕩に嫌悪感を抱いたと描かれている。

³⁸ 作中には、次郎の父が出張中の旅先で、彼と情事のある女中がその後に追って宿に現れるという話がある。

³⁹ 和吉は常に女遊びで家に不在であり、妻のりようが和吉を家に帰らせるため、女のところへ押しかけ、亭主を返せと子連れで強談判まで及んだことさえもあった。原満三寿、『評伝 金子光晴』、東京、北溟社、2001、17。

⁴⁰ 以上、前掲書『野蛮人』、300-302。

⁴¹ 大鹿卓、「小さい魔・遺稿」、『文芸日本 大鹿卓追悼号』、東京、文芸日本社、1959、10。

⁴² 前掲書『評伝 金子光晴』、15。

次郎は父に「肉體的な嫌悪感を抱き」、父を「一種の汚辱として思い悩」み、「度々奥さんを換へる」樋口にも「ただ漠然と性的なものと結びつけて侮蔑を感じ」⁴³、また自分の北海道での経験は「至純な少女の将来に償しない」、「汚濁の者になることを努めてきたやうなものだ」と思う⁴⁴。つまり、次郎は父や樋口ないし自分自身にも「性」を主とする道徳的嫌悪感を持つのだ。このような「父親への反発・自己嫌悪」は「火薬」にも繋がり、和吉の放蕩に対する卓の反感に由来していると思われる。一方、こうした嫌悪は功利主義の養子縁組に対する次郎の心情にも反映されている。次郎は「自分に無断で口約を与えた」父を非難したいが、「唯々諾々と父のうしろに隠れて引き退つた」自分にも「唾をはきかけたかった」⁴⁵。つまり、次郎の「父親コンプレックス」は性的なものだが、人生の進路に関わるものでもあり、両者は樋口の娘——「童女」の身に接合している。作品名はこのことに由来すると考えられる。

しかし、「童女」は私小説ではなく、それを克服しようとするものだ。この頃の昭和文壇は相変わらず私小説の克服に努力を続け、新進作家の大鹿もその例外ではない。武田麟太郎の文芸時評によれば、「火薬」が掲載された『中央公論』は「新人傑作集」として注目を集め、その収録作品の大半は身内事情をテーマにしたものだが、それはかえって「新進作家の反動的側面」を示している⁴⁶。プロレタリア作家は社会関係を直接表現しようとするため、個人を抹殺した理論に陥り、社会関係や階級人間における「複雑多岐な現実を負けた」ということに、新進作家は反発するが故に、彼らの諸作は私小説の復活ではなく、世界的苦悩や社会的憂慮を個人的なものに還

⁴³ 前掲書「童女」『野蛮人』、292-293。

⁴⁴ 前掲書「童女」『野蛮人』、297。作中では明言されないが、性的経験を指すだろう。

⁴⁵ 前掲書「童女」『野蛮人』、295。

⁴⁶ 武田麟太郎、「血の問題」、『東京日日新報』、昭和10年11月26日。池内輝雄、『文芸時評大系 昭和篇I 第十一卷 昭和十年 [下]』、東京、ゆまに書房、2007、399。

元し、そこに中心を置くという試みとなった⁴⁷。実際、本作では困窮している樋口は急病で亡くなり、未亡人が娘を連れて姿を消したという話をする父の顔に、次郎は「卑しい影の走るのを見て」「目をそらした」という場面で終わっている⁴⁸。大鹿は父の情事に取材したものの、それは単なる和吉へのコンプレックスではなく、和吉が体現する「父」世代の中小鉱業者の窮屈な生き方や末路を点描し、そこから私小説の克服を試みようとしたのだ。

こうして考えるなら、「野蛮人」以来の諸作に通底している「父親嫌悪」は、実に重要な意味を持つテーマだと言えよう。諸作の主人公たちは類似した心境を持つのだ。それは「政府一大資本家」の癒着構造における中小鉱業者の生存難、中小鉱主の父への不満不平、労働者への同情と無力である。こうした複雑な思惑は、「小ブルジョアの良心」とも呼べよう。この「良心」は「公的」なもの（＝産業構造的・階級的な問題＝「中間層の衝突・矛盾」）でもあり、「私的」なもの（＝性的・道徳的な問題）でもある。それらの思惑は三つの作品を通して「父」というイメージに集約される。つまり、大鹿の父・和吉のみならず、明治以来の中小鉱業者の「父」のイメージを対象化、問題化するということだ。主人公たちは実際に行動に移したことがないが、彼らには「父」に代表される問題を乗り越えようとする意志が潜んでいるのではないかと思われる。これは「鉱山師の文学」の地盤である、ということを確認しておきたい。

3. 「倫理主体」としての技術者：「金鑛」

「鉱山師の文学」は小ブルジョアの立場から出発したものだが、「鉱山」の開発・生産を描くものである以上、労働文学の一種とされるべきだと考えられる。しかし、大鹿が小説家として文壇に登場したのは昭和十年代である⁴⁹。この頃、労働文学の主力だった左翼

⁴⁷ 前掲書『文藝時評大系 昭和篇I 第十一卷 昭和十年 [下]』、399-400。

⁴⁸ 前掲書「童女」『野蛮人』、309。

⁴⁹ 大鹿は1922～35年に東京府立第八女子高校で化学教師として勤めていた。プロレタリア文学の全盛期は、恰も大鹿が詩人から小説家へ転身する前の

作家は既に転向の季節に入り、困難な政治情勢で文学の課題を思索し、自らの活路を切り開こうとしていた。大鹿の生涯に関する資料が極めて少ないため、彼と左翼運動との関係は不明瞭だが⁵⁰、前述した創作上の立場から見れば、大鹿は島木健作⁵¹や橋本英吉⁵²のような労働者・農民作家の間とは本質的な差異が存在していると思われる。このため、大鹿は左翼作家と比べてみたら、創作過程における精神構造が一致しているとは考え難い。この前提を念頭に入れながら、大鹿の作品を取り上げる。

「金鑛」(1937)はそれまでの作品と一線を画し、鉱山師の文学の登場を宣告するようなものだ⁵³。主人公の鉱山師の松井は旧友の柳田に頼まれ、東北の鉱山の現地調査へ赴く。ストーリーは、投資客を奪い合う鉱山ブローカー、無駄な探鉱法で半生を浪費した鉱山主、昔の夢の名残りを鉱区図に描いて日々を送る老鉱夫など、松井の見た様々な人間像が中心に展開され、特に「山師」の描写に力が入れている。

松井はブローカーの樋口の紹介で、老いた山師の成瀬を訪れる。

「半白の毬栗頭」の成瀬は「濃い眉にも一徹者らしい氣配が窺へ」、松井が小刀で標本の鉱石を突いたことに、ひどい訛りで金が取れて

空白期でもある。尾崎秀樹・大森倅二、「大鹿卓年譜」、前掲書『文芸日本大鹿卓追悼号』、61-62 参照。

⁵⁰ 大鹿が「野蛮人」を執筆した動機とその取材は、当時の無産政党的全国大衆党の要員だった河野密から大いに助力を得たと、台湾文学研究者の河原功は推測しているが、河原は大鹿が左翼作家だと断言してはいない。河原功、「大鹿卓「野蛮人」の告発」、「日本文学に現われた霧社蜂起事件」、『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点—』、東京、研文出版、1997、63、84 参照。

⁵¹ 本名は朝倉菊雄(1903-1945)である。農民運動に参加して検挙され、転向後に作家生活に入る。作品は「癩」(1934)「盲目」(1940)などがある。

⁵² 本名は白石亀吉(1898-1978)である。小学校卒業後、郵便局員や炭鉱夫を経て上京し、プロレタリア文学運動に参加し、炭鉱労働者小説で認められ、後に転向した。作品は「炭坑」(1935)「樗の芽立」(1939)などがある。

⁵³ 鉱山師を主人公とする大鹿の作品は、「探鑛日記」(『中央公論』9月号、1937)が最初だが、それは鉱山を主題にするものではなく、辺境の大自然に置かれた人間性の問題を取り扱うものだ。拙稿「大鹿卓研究—戦前昭和期のモダニズム文学を視座に—」参照。

しまった標本は「本尊のない寺のようなもの」だと怒るが、松井はかえって「その素朴な怒りかた」に「好意が持てた」⁵⁴。しかし、成瀬の山は鉱脈が細いのみならず、坑内に「見せるための作り物」さえある。それをすっぱ抜こうとはしないが、松井は「馬鹿にされたやうな技術者の怒り」を感じる。しかも、成瀬が長年以來多くの廢石を「蟻がものを運ぶやうに」「一人でコツコツ運び出した」「辛苦の跡」と、ついに「坑内の模様を作り變へることに思ひ到つた心境」こそ、「むしろ同情に價する」とも思う⁵⁵。松井一行はほかの鉱山を買収するつもりだったが、売山ができない成瀬がその代りに娘のお菊を身売りしようとしたため、お菊を庇う樋口と利欲に走る松尻という二人の鉱山ブローカーの間で喧嘩が起こった。松井は「自分が欲望のうごめきに圍まれて、人々の醜さ愚かしさを眺めまはしてゐるやうな氣がしたが」、他山と契約が出来ても樋口を会社に入れると約束する⁵⁶。その後、契約先の鉱山主から「全幅の信頼」を得て、松尻さえも「仲間として許せる男」になり、今回の調査は「やうやく人と人の結合に達した」と松井は思う。帰りの電車の暗い窓に「三日間の踏査で行き會つた様々な人々の顔」が「つぎつぎに浮んでくるやうな氣がした」⁵⁷。

要するに本作は、一人の鉱山師が落魄した山師の姿を見ながら、「山」をめぐる人々の利益や欲望に圍まれるが、その本心を守りたいと思う物語である。松井が克服したい対象は、時代に遅れた探鉱法で半生の夢が徒勞に歸した「父」世代の山師と、鉱山の巨大な利益をめぐる人々である。この「鉱山師／技術者」（＝松井）の人物像について、近代經濟史を考えたい。

日本近代史では、二回のゴールドラッシュがあつた。一つは明治30年代（1897-1907）で、もう一つは昭和15年（1940）前後で

⁵⁴ 大鹿卓、「金鑛」、『千島丸』、京都、人文書院、1939、283-284。

⁵⁵ 前掲書「金鑛」『千島丸』、285-286。

⁵⁶ 前掲書『千島丸』、294。

⁵⁷ 前掲書『千島丸』、300-301。

ある⁵⁸。二回とも金本位制に関係している。日本は日清戦争の賠償金で貨幣法や金本位制を確立し、全国を挙げて豊富な産金を渴望したため、ゴールドラッシュは「燎原の火のように燃え広がっていった」が⁵⁹、第一次世界大戦の影響で、日本は金輸出を禁止して金本位制から離れた⁶⁰。1930年、国際貿易体制の復帰や国内経済の立て直しのため、金解禁が実施されたが、すぐに世界恐慌の乱波に巻き込まれて深刻な不況に陥った⁶¹。その後、満洲事変・日中戦争による軍資金への狙いや対外決済手段の需要などの原因で、政府は金増産政策を続出し⁶²、再びゴールドラッシュを迎えた。

「金鑛」の主人公・松井はこうした激動の近代経済史を生きる一人だ。松井の人物像は少年時代の大鹿が秋田鉱専で受けた思想的・精神的影響が大きいと思われる。1911年成立の秋田鉱専は全国唯一の鉱山専門学校で、創立当時の校風は初代校長の小花冬吉（1856-1934）に大きく影響された。小花は「冷静なる理智の裡に一点の情熱燃ゆる」という謹厳寡欲、清廉潔白な人格者で⁶³、退官前の演説でも「世間に見るに一身の利害の為に仁義を軽視するは常人の通弊である」と学生達を戒めている⁶⁴。「小花精神」は大鹿のような大正年間の卒業生の心に強く刻まれたが⁶⁵、松井が感じた

⁵⁸ 浅田政広、『北海道金鉱史研究』、北海道、北海道大学図書刊行会、1999、433。

⁵⁹ 日塔聡、「北辺のゴールドラッシュ」、谷川健一・大和岩雄編、『民衆史の遺産 第九巻 金属の民』、東京、大和書房、2016、367-368。

⁶⁰ 戦時下の世界各国では金輸出が禁止され、日本政府は投機者が日本国内から金を持ち出すことを恐れた。中村隆英、『昭和恐慌と経済対策』、東京、講談社、1994、33。

⁶¹ 前掲書『昭和恐慌と経済対策』、103-162参照。

⁶² 前掲書『北海道金鉱史研究』、433-435。主な政策は「日本銀行金買入法」（1934年4月）、「産金法」「金準備評価法」「金資金特別会計法」（1937年8月）、「日本産金振興会社法」（1938年3月）などがある。

⁶³ 小花は工部省技師、秋田鉱山監督局長や八幡製鉄所の初代製銑部長を歴任し、近代鉱業の先駆者で、在任中は教官に人材を集結し学生を全国から選び集めた。編集委員会、『秋田鉱山専門学校 秋田大学鉱山学部 50年史』、秋田、秋田大学鉱山学部、1961、29。

⁶⁴ 小花冬吉、「別れの一言」、岩谷東七郎、『小花冬吉先生』、秋田、北光会、1933、217。

⁶⁵ 「座談会 大正年間卒業生を中心として」、前掲書『秋田鉱山専門学校 50年史』、173-187。

のは正に「世間の通弊」——ゴールドラッシュという名の欲望だ。

ゴールドラッシュは二回とも北海道を中心に起こった。明治期では無許可の密採とそれに対する取締、鉱區出願の競争、鉱主と採取人の対立などが非常に激しく、内地から渡航した採取者が大勢いた⁶⁶。採取者の今堀喜三郎によれば、当時の「砂金掘り」は「只一途砂金を求めて蝸牛の如く常に衣食住を背に負うて」「次から次へ深山幽谷を跋涉」し、一攫千金の夢を追う「毛色の変った人種」で、「精神的に」「全然個別の存在」であるし、一部の砂金掘りの間で贅沢は癖となったようだ⁶⁷。ここでは特に、「砂金掘り」とは労働者の鉱夫ではなく、技術者の山師を指していることに注意したい⁶⁸。一方、昭和期に至り、政府は産金業への融資や植民地の金山開発を推進し、国策会社の成立で自らも金鉱山経営に乗り出し、金鉱山数の増加には「急激かつ異常な突出が一目瞭然」である⁶⁹。明治から昭和にかけるゴールドラッシュに、人間の深い欲望は国の政策と相まって増生し、ついに国の欲望に呑まれた。

「金鑛」の主人公の松井が身を置くのは、昭和期のゴールドラッシュであるが⁷⁰、彼が見た山師達、感じた時代の雰囲気は明治以来の二回にわたる「狂気時代」とその中で生きている人々だ。しかし、松井が直面しているのは、旧時代の山師と時代の狂熱に巻き込まれる人々だけではないと思われる。なぜなら、金銭欲は古今東西を問わず人を突き動かすものだが、近代日本のゴールドラッシュは国の需要で発生したものだからだ。それは国の政策と近代資本主義によ

⁶⁶ 前掲書『民衆史の遺産 第九卷 金属の民』、367-386。

⁶⁷ 今堀自身は父と義兄から「金を儲けるな」「金を出して楽を買う」と説教され、「愈々金儲けは禁物と見える」と語った。前掲書『民衆史の遺産 第九卷 金属の民』、388-390。

⁶⁸ 今堀自身は「鉱山師」だと自任する。前掲書『民衆史の遺産 第九卷 金属の民』、387。

⁶⁹ 政府は更に愛国金献運動による国民の装飾品の供出で「街の鉱山」を目指し、「国策順応、誠心奉公」と代々相伝の大切な金製品を献上する人々等が美談風に大きく取り上げられ、また北海道大学の学生さえも砂金採掘に勤労働員された。前掲書『北海道金鉱史研究』、435-439。

⁷⁰ 富澤有為男によれば、「金鑛」は「人生の妙味を衝いて、現代の現實に觸れた最もデツサンの正しい作品」であるのも、この故であろう。前掲書『千島丸』、248。

って翻弄された人間性（＝松井が感じた「欲望のうごめき」「人々の醜さ愚かしさ」）で、日本国家の近代化過程の根底にある暗部とも言えよう。こうして読むと、松井は国家主義と利己主義的な世相の中である種の理想を守り、一種の「倫理主体」と造形されたと考えられる。なぜ大鹿が鉱山師を「倫理主体」として描いたのか。それは昭和文学史の節目にも関わると思われる。昭和十年代では左翼運動の壊滅とともに、プロレタリア文学の崩壊や転向文学などの文学史的事象が発生したが、その波紋は左翼作家だけではなく、文壇中に及んでいた。伊藤整の指摘通り、マルクス主義運動はそれ自体だけではなく、明治・大正期のすべての宗教・政治・文学思想の後を受け、それらのものに代わる「新しい倫理的な善の思想」と看做されていた⁷¹。この「倫理的な善の思想」が消滅されたことは、思想の持ち主＝「倫理主体」の喪失をも意味している。

ここでは転向文学を例に、極めて簡単に説明したい。本多秋五の指摘通り、転向文学とは一義的な意味で用いられていたものではないが、殆どすべての作品に共通する性格は、「挫折を知らぬ思想戦士」＝「不屈な英雄的同志」を「理想的な人物」と看做し、「その人物が献身する思想」に「一点の疑惑」をも差し込まず、すべての非が「非力に敗退した」主人公にあるとする、というものだ⁷²。ここでは、「敗退の主人公」の身によって表出されているのは、即ち「倫理主体の喪失」であることに注意したい。一方、知識人の転向を生んだ根拠は「国家権力による外的強制」のほか⁷³、当時の日本共産党の運動方針の観念性による知識人の「大衆からの孤立感」が

⁷¹ 前掲書『近代日本の文学史』、336。

⁷² 本多秋五、「転向文学論」、『本多秋五全集 第4巻』、東京、菁柿堂、1995、255、258、266-267。本来、その先行概念としての「転向」は、「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」と定義されたが、その実質は一義的な概念ではなく、転向の方法や形態、転向主体の履歴、転向の状況、時期や評価などによって多岐にわたるものだ。鶴見俊輔、「序言 転向の共同研究について」、思想の科学研究会編、『共同研究 転向1 戦前編 上』、東京、平凡社、2012、29、39-49。

⁷³ 前掲論文「転向文学論」、254。

「最大な条件」となったため⁷⁴、知識人には「大衆との新しい関係」を求めるため転向した事例がある⁷⁵。つまり、「倫理主体の喪失」と「大衆からの孤立感」は、当時の転向文学において最も重要な問題だったと言えよう。

具体的な例として、中野重治「村の家」(1935)と島木健作『生活の探求』(1937)などが挙げられる。二作とも類似した構造を持つ。即ち、左翼の知識人青年は政治運動に挫折して帰郷し、農村生活に生き甲斐を見つけようとする、というのが大筋だが、作中の「父」の役割に注意したい。『生活の探求』の主人公は父の慰めを受け、帰農生活に大衆との連帯感を求めるのに対し、「村の家」の主人公は父の叱責を受けても「やはり書いて行きたい」と自らの意志を示している。作中の主人公はそれぞれ異なる道を選んだが、農村生活で大衆と連帯できて新たな道が開けるかを安易に信じるかどうか、ということは中野と島木の分岐点である。文学史家の川西政明によれば、「村の家」には「明治の父と昭和の子の相剋」があり⁷⁶、それは敗北した場所で新たな抵抗の拠点を作ろうとする息子とそれを見逃す父ということだが、もし「村の家」の息子が父の勧めの道に進めば、『生活の探求』の主人公の二の舞になってしまい、そこには中野と島木の決定的な違いがある⁷⁷。

ここでは「金鑛」を「村の家」と比べて考えたい。「金鑛」にも「父子相剋」はあるが、「明治の山師(父)―昭和の鉱山師(子)」という形で表現される。「山師(父)」は成瀬に象徴される明治・大正時代の山師たちとその価値観の体現、またその価値観に影響される人々をすべて克服すべき対象とされる⁷⁸。「村の家」と『生活の

⁷⁴ 吉本隆明、「転向論」、『吉本隆明全集 第5巻』、東京、晶文社、2014、372。

⁷⁵ 鶴見俊輔、「第一篇の要約」、前掲書『共同研究 転向1 戦前編 上』、72。

⁷⁶ 川西政明、『新・日本文壇史 第五巻』、東京、岩波書店、2011、231。

⁷⁷ 川西政明、『昭和文学史上巻』、東京、講談社、2001、371。

⁷⁸ 山師とは本来、鉱山の指導的な地位にある技術者のことを指し、鉱山開発の困難さや金属の相場の激しい変動による投機的・詐欺師的な行為が発生したため、言葉自体に「投機者」「詐欺師」のイメージがついてくるようになった。山口梅太郎、「山と鉱山―鉱山師と資源開発技術者」、荒牧重雄 [ほ

探求』は転向者（＝左翼知識人）が農村生活への投入を通して大衆からの孤立感を克服し、喪失した倫理主体を取り戻すという可能性が問われた作品だが、「金鑛」は鉱山師（＝技術者）が新たな倫理主体となり、利益や欲望に満ちた世の中（＝資本主義の近代社会）を統合しようとする。「野蛮人」における左翼全盛の時代にかつて拒否された小ブルジョアは、「金鑛」において鉱山師に転身して歴史の主角を担える立場として想定することが可能となった。「父親嫌悪」というテーマは、以前の諸作における一小ブルジョア個人の階級的・道徳的反省から、鉱山師による古い価値観の克服と新しい世界観の成立へと転換した。「山」の世界から立ち上った倫理主体は、敗北後に再出発した左翼知識人ではなく、新しい道徳観や技術力を持つ専門技術者である。鉱夫・坑夫を主体とした労働者の文学と異なる「鉱山師の文学」は、ここに誕生したと言えよう。

4. 生産と生活の間に：『坑道』と『金山』

全十巻の「生活文学選集」（春陽堂、1939）に収録される『金山』は大鹿卓の長篇小説で、「金鑛」の姉妹作と視されてもよい⁷⁹。この選集は国策文学の一種として、その内容は各生産分野にわたり、著者は殆どプロレタリア文学の経歴を持つ者である⁸⁰。平野謙の指摘通り、「国策文学が主として旧左翼文学者によって推進された」のは彼らが「政治的イデオロギーを図式的に文学化す一種の熟練工」だからだ⁸¹。『金山』は「生活文学選集」の中の一冊だが、前述したように、大鹿はその独自の立場を持つ。本項では生産文学の意義を



『金山』表紙

か] 著、『東京大学公開講座 32 山』、東京、東京大学出版会、1981、220-230。こうしたイメージは、正に大鹿が対決しようとした対象であろう。

⁷⁹ 富澤有為男は「金鑛」解説で、大鹿は『金山』に至って「一層その積極性を頭はして来た」ため、是非「併讀して戴きたい」と語る。このことから両作品の関係性が見られる。前掲書『千島丸』、249。

⁸⁰ 池田浩士、『海外進出文学論・序説』、東京、インパクト出版、1997、244。

⁸¹ 平野謙、「昭和文学史」、『平野謙全集 第三巻』、東京、新潮社、1975、286。

考えたうえで、同選集の橋本英吉『坑道』を対照として『金山』を考えてみたい。

1939年3月、内閣に「生産力拡充委員会」が設置された以降、生産文学は注目されるようになった⁸²。興味深いことに、生産文学は当時新しい文学の可能性を捉えるものとして考えられていた⁸³。窪川鶴次郎によれば、戦時下の政治・社会情勢の変化に、従来の私小説や芸術派の作家が対応できなくなっているのに対し、旧左翼作家はそこから新しい領域を切り拓くことが可能だが⁸⁴、物を生産する行為や場所より、生産の行為を成す人間やその生活に眼を向けることに重点を置くべきだと、窪川は強調している⁸⁵。「生活文学選集」は、こうした背景のもとに誕生した。

『金山』と対照させるため、橋本英吉『坑道』を先に取り上げる。主人公の中宮幾太は過去の労働運動に参加した経験がなく、より「現代的な」坑夫で、炭坑から離れて都会に新しい人生を求めようと看護婦の恋人に誘われたが、彼は坑夫が置かれている労働環境を改善していこうと思っているから、坑夫の仲間と「一函会」という懇親会を結成して頑張りたいと願う。

ここでは、戦時下の労働統制に簡単に触れておく。1938年、従来の労働組合の代わりに、政府の直接介入による「産業報国聯盟」

⁸² 前掲書『平野謙全集 第三巻』、234。

⁸³ 評論家の板垣直子によれば、生産文学は「積極的な思潮、素材的に文学を開拓してゆこうとする新精神に結びついて」「その特殊な雰囲気や過程がより専門的であること、調べた知識や積極的な生活経験の世界であることを強く思はせる」。板垣直子、『事變下の文学』、東京、第一書房、1941、106。

⁸⁴ 窪川鶴次郎、「生産文学論—文学の新動向との関係—」、『現代文学論』、中央公論社、1939、595-597。窪川によれば、生産文学は「今日の文学の全面に乗り出してきて一般の関心を集めるやうになった」のは、「数年前から生産力の拡充が我が国の政治経済上の中心的な問題」となり、「この事變によつて、一層の拍車をかけられることになった」からだが、「文学の側から言へば、従来のやうな廣い意味での藝術至上主義的な建前の文学で」「政治的、経済的な情勢の推移に直接的に感應することは出来る筈がない」ため、「過去のプロレタリア文学が發展せしめた生産面に對する關心」が「全く異つた生産文学を開拓せしめるのに大きな役割を果してゐることは見のがし難い」。

⁸⁵ 前掲書『現代文学論』、599。

が発足し、産業の使命は「皇国興隆」に貢献するという理念を当局は徹底的に普及させるため、各事業所単位に産業報国会を設けて「労資一体」を図ることに対し、各労働組合は「罷業滅絶」を宣言し、戦争への全面協力によって組合を維持しようとしたが、ついにそれぞれ解散した⁸⁶。

橋本の『坑道』は産業運動の精神や実践を問題にした作品とされ、主人公中宮は作中の「中堅報国会」に対立する気持がなく、坑夫が自発的意志で行う会こそ真に時代の要求に合致していくと考えたが、その考え方は「むしろ国家的要請を逆手にとっている」⁸⁷。なぜなら、産報運動は国家の幸福を至上として労働者の不満を抑える「上から下へ」のものだが、中宮の考え方は坑夫の幸福が国家の幸福となる「下から上へ」のものだからであり、中宮はその矛盾に一種の「限度」を感じ取り、その「限度」を越す方向でしか坑夫の幸福が得られないことを悟る、というところで本作は終わっている⁸⁸。橋本の前作『炭坑』（1935）は労資対立を作中に表現されることが可能な時期だったが、『坑道』は国家主義的労資協調しか認められない状況であったため、橋本はファッション化に対応し、粘り強く創作活動を行ったと指摘されている⁸⁹。つまり、『坑道』は生産文学の名を借りた一種の後退戦である。この作は「労働者対国家」の生産関係を問うことを通して、生産行為を成す人間の状態を問う目的を

⁸⁶ 有沢広己監修、『昭和経済史』、日本経済新聞社、1976、179-182。

⁸⁷ 国岡彬一、「昭和十年前後における文学変質に関する一考察—橋本英吉の「炭坑」・「坑道」をめぐって—」、日本文学研究資料刊行会編、『プロレタリア文学』、東京、有精堂、1975、150-151。

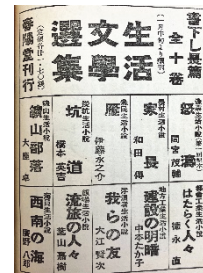
⁸⁸ 国岡によれば、「この作は明らかに産報運動への批判」だ。前掲論文「昭和十年前後における文学変質に関する一考察—橋本英吉の「炭坑」・「坑道」をめぐって—」、151-152。また、池田浩士によれば、中宮が問うのは「資本の利潤」と「国家や社会のため」とを区別する言葉の裏で一体何の違いがあるのか、ということである。池田浩士、『石炭の文学史』、東京、インパクト出版、2012、309。

⁸⁹ 前掲論文「昭和十年前後における文学変質に関する一考察—橋本英吉の「炭坑」・「坑道」をめぐって—」、153。橋本はその精神の深部に資本、社会主義社会という条件を超え、特定概念の「労働者」を「働く者一般」という概念へ転換する立場で抵抗を続けていたと指摘される。判沢弘、「労働者作家—橋本英吉・山田清太郎・徳永直」、思想の科学研究会編、『共同研究 転向4 戦中篇 下』、東京、晶文社、2012、394。

達成し、生産文学として成立し得たと言えよう。

では、大鹿の場合はどうだったか。「生産者」とは労働者だけではなく、技術者をも含む概念である。もちろん、技術者は必ずしも小ブルジョア出身ではないが、大鹿の場合はそうとも考えられる⁹⁰。

『金山』は戦争下の鉱山開発を一技術者の視点で描くものだ。主人公の鉱山師杉山は学校を出て、北海道、朝鮮、満洲から樺太・千島にわたる各地の鉱山事業に取り組み、ようやく秋田の松倉鉱山を独力での経営を試みたが、税金の件で共同経営者の茨田に騙される。訴訟を起こして勝ったものの、身から出た錆だと諦め、技術者として再び鉱山調査の仕事に着手し、飯場頭の岡本に数名の鉱夫を連れてくるように呼びかけ、北海道の金山の開発を始める、



『坑道』新刊

というのが大筋だ。『坑道』の新刊予告によれば、『金山』の原名は「鉱山部落」と予定され⁹¹、いわゆる「鉱山町」の人々の生活様相を描く意図があったと思われる。事実、大鹿は「生活の積極面のみ描くこと」にも「文学形式を借りて生産部門の紹介」にも特別な興味を感じず、ただ産業の職場で今日を生き通す人間の「生活感情の根拠」、「いかに愛と情熱を人生に感じつつある」という角度で人間の姿を探究したいと自ら語ったが⁹²、その探究する主体は鉱山師にほかならない⁹³。つまり『金山』は同じく鉱山師を中心に山の世界に生きる人々を統合するという基調を作っていることが理解できよう。

『金山』では鉱山内部の人間関係は岡本、時代的位相下での鉱業

⁹⁰ 大鹿家は愛知県で代々造り酒屋を業とし、傍ら廻船問屋として手広く商売をしていたが、後に家業は傾いていたが、地方の名家だった。前掲「大鹿卓年譜」、61。

⁹¹ 『坑道』と『金山』はそれぞれ生活文学選集の第五巻と第八巻で、前者の新刊予告に第八巻は「鉱山部落」という題名で記された。

⁹² 大鹿卓、『金山』、東京、春陽堂、1939、398。そこには銃後の産業戦士を宣伝するのではなく、金山開発の現実における位相への批判を控え目に提示する姿勢を保たせたと指摘される。小笠原克、『近代北海道の文学 新しい精神風土の形成』、東京、日本放送出版協会、1973、404。

⁹³ 大鹿自身によれば、「鉱山技術者の立場に特別な關心をむけて比較的多く紙数を費した」。前掲書『金山』、397。

問題は杉山の目と心を通して描き分けられているが、両者が統一的視野で把握されると言い難いと指摘されるが⁹⁴、筆者の考えでは、『金山』は「金鑛」の延長線上にあるため、最も重要なのは鉱山師を「倫理主体」として確立させるということだ。『金山』において、「倫理主体」としての資格を有することを証明するため鉱山師が超克しなければならないのは、もはや世の中の欲望ではなく、自らの私利私欲である。故に、この作は本質的に杉山が自分の私欲を超克する旅を描く作品で、鉱山師杉山は旅の主体で、飯場頭岡本がその補佐役である⁹⁵。杉山と岡山が見聞した鉱山内外のすべてはこの目的を達成する過程でしかない。

この旅は「札幌の事件」で終わっている。杉山は鉱山学校の後輩の梅津の死を知らされ、同窓の学友と共に札幌へその未亡人を見舞いに行き、鉱山ブローカーの梅津は鉱山の利益の配分で共願者に銃撃されたと彼女から聞いた。亡友は私欲のため身を亡くし、自分でも欲のため身を誤ろうとしたのではないかと杉山は思い、ゴールドラッシュに狂う世間を私利私欲の徒輩と眺める自信を失くす。帰山した杉山は鍛冶場の火事で重傷を負った鉱夫を見舞いに行って慰めたり、女学校出身で妹を育てるため婚期が遅れた旅館の女将さんと語り合ったり、「鉱山を妻にした」と決意した岡本の媒酌をとったり、逃亡した鉱夫と懇談して許したりする。それを通して、彼は「自分の労苦と同時に鑛山の人々の労苦」を思いやり、「自分が多くの人々を強引に引き擦つて、なにか空怖しい運命へ突進してゐるやうな気がした」⁹⁶。こうした中で、杉山は「この山奥に立て籠つて、一意専心、脈に當てる事のみ考へよう」という新しい信念が「胸の

⁹⁴ 前掲書『近代北海道の文学 新しい精神風土の形成』、408。

⁹⁵ 紙面の制限で詳しく説明できないが、一例として、作中では岡本の遭難騒ぎを描かれる。岡本は猛吹雪の山中で道を迷って気を失ったが、幸いに助けられた。杉山は犠牲者が出るのは鉱山の常識だと思ったが、岡本の寝顔を見て反省する。自分は個人の欲望のためではなく大きな意義のある仕事に携わっていると自負したが、「胸の裏が崩壊個所のように」なり、「その醜い土塊や石塊」の一つ一つが過去の様々な過誤で、一番大きくて醜悪なのは松倉の件だと、杉山は思う。前掲書『金山』、176。

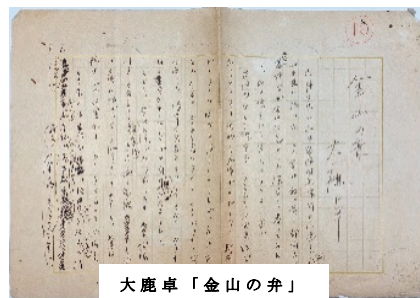
⁹⁶ 前掲書『金山』、367。

裡に根を下し」、松倉以来の「すべてを思ひ捨てた」、というところで本作は終わっている⁹⁷。

作中の「札幌の事件」は実在の「札幌ピストル事件」に取材し⁹⁸、それは国策によるゴールドラッシュに狂う世間を象徴する事件とも言えるが、ここで重要なのは「倫理主体」の完成である。杉山が失くした自信を回復できたのは、彼が鉱山師としての技術力や知識によるのではなく、自分と他人の労苦が重なり、そして自分が「人々の労苦」に責任を感じたためである。そこで松井は大衆と連帯できるようになり、鉱山師は「倫理主体」となる資格を獲得する。『金山』と『坑道』を対照的に読むと、杉山が面した「世間」と中宮が感じた「限度」は原理的に共通するもので、即ち国策によって形成された生産環境だと思われるが、坑夫出身の橋本は自らの労働者経験を抛り所に後退戦を続けたのに対し、技術者の大鹿は秋田鉱専で受けた專業的、思想的教育を土台に、「野蛮人」以来の世界観を完成させ、『金山』はむしろ一種の「前進戦」となったと言えよう。

事実、大鹿は作中の思想の実践を試みている。というのは、近年筆者は偶然大鹿自筆の未発表原稿「金山の弁」を手に入れたのだが⁹⁹、その内容は以下のようなものだ。

大鹿は六月末に親友の富澤有為男と共にある金山を見学した。事の起こりは富澤の親友 A 氏の後見人が長年「種々の鉱山で他人に瞞され」「相當の資金



大鹿卓「金山の弁」

⁹⁷ 前掲書『金山』、370。

⁹⁸ 1938年11月5日、北海道支笏湖の対岸の千歳金山にある「福神沢鉱」をめぐって、東京の鉱山業鈴木某（五〇歳）と札幌の土岡某（三八歳）による共同購入の利権を、土岡が無断で他に売却、独占しようとしたのに対し、鈴木は來札して談判破裂したあげく、ピストルで鈴木を射ったということだ。『北海タイムズ』昭和13年11月8日。本稿は前掲書『北海道金鉱史研究』、234、258より転載。

⁹⁹ 2021年2月26日、インターネットを経由して東京の古本屋から購入した。原稿には字数を計算した跡があり、発表する予定のようであったと思われる。原稿の作成年月は不明だが、木原直彦、「北海道文学史年表」、『北海道文学史 大正・昭和戦前編』、北海道、北海道新聞社、1976、349によれば、大鹿は1937年7月に千島へ行き、金山見学はその前に行われたと推測できよう。

を傾け」、その人が最後として長く持ってきた金山を試掘し、A氏の助力を求めてきたことにある。事情の経緯を聞いた大鹿はその山を検分してみたが、鉱山の開発には一般の概念と違い、「極めて地味な数年の探鉱時代」が最も必要だが、自分が検分した金山は「友情の集結によつて早く採掘時代に入ることを期待し」、関係者は金を「有用に用いる用途を心得てゐる人達ばかり」だから、諸君は「笑ふこと莫れ」。鉱山は「男子一生の仕事として最も快適な事業」だという。

この原稿で読み取れる大鹿の情熱は、作中の杉山の信念にも反映されている。『金山』は北海道における金山業の大御所の福沢についての杉山と岡本の話し合いで結末を迎える。若い頃の福沢は幾度の盛衰を経たK金山の採鉱課長を勤めていたが、大世帯の鉱山が一旦休山して再び着手するのはなかなか容易ではないと知り、採算が合わなくても一時の犠牲を忍んで持ち堪えたいと思い、自殺の覚悟をしたうえで、鉱脈に当たったという偽電を本社に打ったが、幸い大きな鉱脈に着脈し、鉱石を積んだバケットを見て、福沢の頬には「思わず知らずに」「涙が流れた」¹⁰⁰。杉山は語れば語るほど、福沢の言葉に籠った細かい感情を節々まで思い出し、また自分の鉱山小屋で一遍話すだけでも、一層身に沁みて語られるが、もし脈に当たらなかつたら、それこそ「身の破滅」だと語る。岡本が杉山の最後の言葉の余韻を吟味する、というところで本作は終わっている。言うまでもなく、福沢の話に感動する杉山の姿には、「地味な探鉱時代」と「男子一生の仕事」に対する大鹿の忍耐と情熱が反映されている。換言すれば、大鹿は実世界の行動で作中の杉山の生存状態を実践し、思想と行動の統一を試みたことが理解できる。鉱山業に関連する人々の労苦へ関与を与えること、そして実世界の鉱山師の生存状態を取り入れた点で、『金山』は新たな倫理主体を樹立し、「鉱山師の文學」の達成点をも示している。

¹⁰⁰ 前掲書『金山』、225。

5. おわりに：近代文学における「鉱山もの」の流れ

以上、大鹿の「鉱山もの」を見てきたが、川村の指摘に筆者は異論を唱えたい。鉱山師の文学とは、鉱山師を主体に戦時下の国策によるゴールドラッシュと金山業の生産場面を描くものだ。それは一人の小ブルジョアが自らの階級的・道徳的問題を超克し、倫理主体として世の中を統合する情熱や意志を表現しているものだが、一人の技術者が見た「山」の仕事に関する生産者を活写し、そこから私小説を克服しようとするものでもある。つまり、小ブルジョアと技術者の二重立場に立つ作品と言えるのだ。鉱山師の文学を貫いた主旨は「近代人にとって驚嘆すべき絆」だと論じる川村の指摘は、おそらく「野蛮人」を主な研究対象とするポストコロニアル研究における「脱／反近代」「植民地—帝国」など、先行する大鹿卓研究のアプローチに影響されているのではないかと思われる。

では、ここで近代文学における「鉱山もの」の位置づけを考えよう。既述の通り、大鹿は「父子対立」を作品の中軸にしている。このテーマは古今東西の文学の大きな主題でもあるが、大鹿の立場に近い近代文学作品としては、まずは夏目漱石「坑夫」（1908）が想起される。主人公の「僕」は裕福な家庭で生まれ、父への反発や恋の悩みで東京を出奔し、周旋屋に銅山まで連れられていくが、気管支炎で坑夫にはなれず、帳附を五か月勤めて下山する。この作は自然主義への違和感で、主人公の心理状態の再現を試みるもので、先行研究は主に心理主義、読者論や文体論を視座に進められてきた¹⁰¹。東京出身の教養ある語り手の「自分」と「獰猛」の極まる「畜類」のような坑夫との階級による対立意識は露骨だが、漱石はその社会的背景を掘り下げる意図を持たず、むしろ未知の環境との接触で「自分」の内面の変化の描写に比重を置き、環境はその変化の発生を促していく触媒の役目を果しているため、「坑夫」は主人

¹⁰¹ 加藤禎行、「坑夫」、小森陽一 [ほか]編、『漱石辞典』、東京、翰林書房、2017、606。

公の精神形成を集中的に追っていく作品だと指摘されている¹⁰²。

紅野謙介によれば、「坑夫」作中の随所にある差別的表現は、当時の一般的な見解の通りに坑夫を地の底で働く最低辺の下層労働者と受け止め¹⁰³、語り手の「自分」は紛れもなく差別意識の所有者で、漱石もその誹りを免れないが¹⁰⁴、「坑夫」連載の一年前の1907年、足尾銅山では一千余名の坑夫が悪劣な労働条件に怒り、事務所を焼き打ちするという「足尾暴動事件」が起きており、その前には日本最初の公害事件「足尾銅山鉱毒事件」もあり、様々な関連報道がなされている。漱石がこれらの事件に隠された「資本—国家」の癒着関係を意識しなかったはずがない。とはいえ、「坑夫」は社会正義を克明するものではなく、語り方や文体の変換で文壇の主流の自然主義に反発し、「小説とは何か」という問題を再考しようとする作品であるため¹⁰⁵、労働問題は論外とされてきた。

こうして考えると、漱石と大鹿は同じくブルジョアとも言え、「坑夫」と「野蛮人」の主人公の出身や家出の理由などはかなり類似しているが、労働者への視線に関して言えば、明らかに大鹿のほうが好意的で、より生産現場に近い。それはもちろん時代差、経済的条件、作家自身の経歴や文学課題の相異などによるが、ブルジョア作家として労働者を描くことを通して、近代文学の底流の自然主義・私小説に対抗しようとした点で、二人は同一線上にあるとも言えるだろう。

「父子対立」という課題の流れをもう少し辿ってみれば、昭和十年前後、大鹿の背後には一つの見落せない大きな影が存在している。

¹⁰² ブルナ・ルカーシュ、「宮嶋資夫『坑夫』とゴーリキーの〈放浪文学〉—石井金次の人物像の二面性を中心に—」、『国文学研究 167』、東京、早稲田大学国文学会、2016、67。同氏によれば、同時期の作家として、鉱山の実態を観察・批判するのは宮嶋資夫（1886-1951）である。

¹⁰³ 紅野謙介、「解説」、夏目漱石、『坑夫』、東京、岩波書店、2020、321。

¹⁰⁴ 前掲書『坑夫』、322。

¹⁰⁵ 「坑夫」の末尾で「自分が坑夫に就ての経験はこれだけである。そうしてみんな事実である。その証拠には小説になっていないんでも分る」と、小説自ら小説ではないと言明しているという点で非常に興味深い。前掲書『坑夫』、282。

即ち志賀直哉「暗夜行路」(1921-37)である¹⁰⁶。元来、若い直哉が友人と共に足尾銅山鉍毒地視察の計画で父と衝突したことは、その後永らく父との不和になる最初の契機であったが¹⁰⁷、実は当時祖父の直道は旧藩主相馬家の家令に就任し、古河市兵衛と共に足尾銅山の開発に従って主家の疲弊する財政立直しに尽力した¹⁰⁸。そこにはブルジョア階級の世代衝突が見られる¹⁰⁹。事実、「暗夜行路」草稿には元来、「父子対立」を個人の問題だけでなく、日本に発生してきた色々な新しい社会運動と共通する普遍的な問題で、また一家の家長の父親と国家権力の枢要の元老と二重写しで捉えられる描写があり、最終的に父への愛情は「個人を圧殺する権力の構造を追究しようとしていた」作品の方向を変えてしまったにもかかわらず、それは志賀のうちに自家内部と外部社会の問題が微妙に結びついている表現だと指摘されている¹¹⁰。

こうして考えると、大鹿は「父子対立」を作品の中軸に、漱石も直哉も感知した課題を完成しようとしたと言えよう。周知の通り、戦前の昭和文壇では、左翼思想は強い影響力を持っていたが、マルクス主義の世界観で、ブルジョア自身は克服されるべき対象である。故に、大鹿による「父」は近代資本社会のマイナス面を象徴し、

¹⁰⁶ 周知の通り、この作は大正から昭和にかけるプロレタリア文学や新感覚派の勃興期を経、1937年について完成し、相当長い時間をかけた大作であり、大鹿らがこの作を意識していないとは思えない。伊藤整によれば、この作品の完成は作家自身だけでなく、彼の文学に関心を持つ人々にも大きな安堵感を与えると同時に、この時期の新進作家はみな彼の創作方法を典型として学んだ。前掲書『近代日本の文学史』、319-320。なお、先行研究はあまりに龐大すぎるため、ここでは「父子対立」に限定して論じたい。

¹⁰⁷ 紅野敏郎、「志賀直哉／年譜」、志賀直哉、『作家の自伝 28 志賀直哉』、東京、日本図書センター、1995、242。

¹⁰⁸ 阿川弘之、「志賀直哉年譜」、『志賀直哉全集 第22巻』、東京、岩波書店、2000、3。

¹⁰⁹ 直哉はこの事件を作品化にした。即ち「或る男、其姉の死」(『大阪毎日新聞』、1920年1~3月)である。この作は鉍毒問題に肉迫したものではないが、父子葛藤の図を側面から支えていると評されている。紅野敏郎、「足尾銅山鉍毒事件と文壇」、『国文学：解釋と教材の研究 第12巻第11号』、東京、学燈社、1967、32。

¹¹⁰ 池内輝雄、「志賀直哉・父子対立の問題」、「一冊の講座」編集部、『志賀直哉』、東京、有精堂、1982、25-27。

「父」の誤りを是正することで、小ブルジョアがプロレタリアートの代わりに倫理主体と成り得る資格を獲得できる¹¹¹。特に、大鹿と島木・中野の前後関係にここで注意しておきたい。ごく簡単に言えば、マルクス主義の原理は「資本—国家」の癒着関係を批判し、新たな世界観を作るというものだが、左翼作家はすでに気力を失って戦線離脱し、「自分—世界」の関係性を再び問わなければならなくなった。この時点で戦線に立とうとした大鹿はマルキストというより、漱石や直哉の流れを汲むリベラリストと言うべきであろう¹¹²。鉱山師を倫理主体とするという大鹿の発想は、プロレタリアートの敗退後に残されたリベラリストの奮戦であろう。

しかし、ここには大鹿の甘さも暴露されている。「鉱山もの」は新たな倫理主体を樹立しようとするという点で一歩進めたが、作中では「資本—国家」と対決することはない。鉱山師の情熱や信念は、結局戦時下の国の意志に回収されるのではないか、ということ我问うことを今後の課題にしたい。とはいえ、名門出身の漱石や直哉は博学偉才の文学者だが、労働現場には縁が遠く、各自の時代の文学課題を背負っていた。彼らが大鹿と結びつけたのは、かつて一世を風靡した左翼運動の影に蔽われながらも、延々と流れている近代知識人のヒューマニズムで、ブルジョア階級に共通する良心であり、大鹿による「鉱山師の文学」は近代文学史上にも類を見ない独自の労働文学であるとも言えよう。

【付記】

本稿は国科会計画「戦前昭和文学研究：以大鹿卓為例」（111-

¹¹¹ それに対し、島木や中野による「父」は古き良き農村共同体の世界を象徴し、転向作家が生活を再建する際の難関となる。両者は明らかに異なる。

¹¹² 1933年以降の数年間、自由主義がファシズムに対する最後の砦として期待されていた。文芸評論家の杉山平助によれば、それまで「第二線或は予備役にまで後退してゐたかに思われ」、「事ごとに反動的インテリの叱咤を蒙っていたリベラリストが再び第一線にまで動員させられるというふ形勢は、すでに昭和八年中の現象に属してゐた」。藤原省三、「第一章 昭和八年を中心とする転向の状況」、前掲書『共同研究 転向1 戦前編上』、120。

2410-H-153-027-) の助成を受けたものである。審査にあたっては、大変貴重な助言を頂き、査読者および編集委員に深く感謝します。また、本稿は 2022 年度台湾日本語教育研究国際学術シンポジウム（2022 年 11 月 19 日、輔仁大学）における発表をもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。発表の際、貴重な御指摘・御教示を賜った先生方に篤く御礼申し上げます。

参考文献（五十音順）

浅田政広、『北海道金鉱史研究』、札幌、北海道大学刊行会、1999。
荒牧重雄ら著、『東京大学公開講座 32』、東京、東京大学出版会、1981。

有沢広己監修、『昭和経済史』、東京、日本経済新聞社、1976。

池内輝雄、『文藝時評大系 昭和篇 I』、東京、ゆまに書房、2007。

池田浩士、『海外進出文学論・序説』、東京、インパクト出版、1997。

池田浩士、『石炭の文学史』、東京、インパクト出版、2012。

板垣直子、『事變下の文学』、東京、第一書房、1941。

「一冊の講座」編集部、『志賀直哉』、東京、有精堂、1982。

伊藤整、『近代日本の文学史』、東京、夏葉社、2014。

岩谷東七郎、『小花冬吉先生』、秋田、北光会、1933。

大鹿卓、「金山の弁」（自筆原稿、未発表）。

大鹿卓、『野蛮人』、東京、巢林書房、1936。

大鹿卓、『金山』、東京、春陽堂、1939。

大鹿卓、『千島丸：大鹿卓短編小説傑作集』、京都、人文書院、1939。

大鹿卓、『大鹿卓作品集』、東京、ゆまに書房、2001。

小笠原克、『近代北海道の文学 新しい精神風土の形成』、東京、日本放送出版協会、1973。

荻野喜弘、『筑豊炭鉱労資関係史』、福岡、九州大学出版会、1993。

金子光晴、『金子光晴全集 第十五巻』、東京、中央公論社、1975。

- 川西政明、『昭和文学史 上巻』、東京、講談社、2001。
- 川西政明、『新・日本文壇史 第五巻』、東京、岩波書店、2011。
- 河原功、『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点—』、東京、研文出版、1997。
- 簡中昊、「大鹿卓研究—戦前昭和期のモダニズム文学を視座に一」、『台大日本語文研究』、台北、台湾大学日本語学科、2022、1-32。
- 木原直彦、『北海道文学史』、札幌、北海道新聞社、1975-82。
- 窪川鶴次郎、『現代文學論』、東京、中央公論社、1939。
- 紅野敏郎、「足尾銅山鉱毒事件と文壇」、『国文学：解釋と教材の研究 第12巻第11号』、東京、学燈社、1967、33-39。
- 小森陽一ら編、『漱石辞典』、東京、翰林書房、2017。
- 志賀直哉、『作家の自伝 28』、東京、日本図書センター、1995。
- 志賀直哉、『志賀直哉全集 第22巻』、東京、岩波書店、2000。
- 思想の科学研究会編、『共同研究 転向』、東京、平凡社、2012-13。
- 谷川健一ら編、『民衆史の遺産 第九巻』、東京、大和書房、2016。
- 中村隆英ら編、『日本経済史 6 二重構造』、東京、岩波書店、1989。
- 中村隆英、『昭和恐慌と経済対策』、東京、講談社、1994。
- 中村隆英、『日本経済—その成長と構造』、東京、東京大学出版会、1996。
- 中村隆英、『日本の経済統制』、東京、筑摩書房、2017。
- 日本近代文学館編、『日本近代文学史』、東京、読売新聞社、1966。
- 日本近代文学研究会、『現代日本小説大系（河出書房版）解説集成 第三巻』、東京、ゆまに書房、2009。
- 日本文学研究資料刊行会、『プロレタリア文学』、東京、有精堂、1975。
- 日本文芸社、『文芸日本 大鹿卓追悼号』、東京、同社、1959。
- 二村一夫、『足尾暴動の史的分析』、東京、東京大学出版会、1988。
- 原満三寿、『評伝 金子光晴』、東京、北溟社、2001。
- 平野謙、『平野謙全集 第三巻』、東京、新潮社、1975。
- 深尾京司ら編、『日本経済の歴史 3』、東京、岩波書店、2017。

ブルナ・ルカーシュ、「宮嶋資夫『坑夫』とゴーリキーの〈放浪文学〉—石井金次の人物像の二面性を中心に—」、『国文学研究 167』、東京、早稲田大学国文学会、2016、60-71。

編集委員会、『秋田鉱山専門学校 秋田大学鉱山学部 50 年史』、秋田、秋田大学鉱山学部、1961。

本多秋五、『本多秋五全集 第 4 卷』、東京、菁柿堂、1995。

丸山一郎、『鉱山業の発達』、東京、岩波書店、1933。

村串仁三郎、『日本の鉱夫—友子制度の歴史—』、東京、世界書院、1998。

吉本隆明、『吉本隆明全集 第 5 卷』、東京、晶文社、2014。